

話題 其の39：“垣間見る在ヨルダンのフィリピンメイド社会”

“ヨルダンで働くフィリピンメイド”に付いては、時折この紙面で話題にしていますが、今回はより彼女達の生活に迫ってみましょう。

5月9日の金曜日、我が家のメイドジュリーの友人であるフェリーさんの誕生日に招待されました。場所は、アンマン市内にあるポストンというマクドナルドと同じタイプのファーストフード店です。当日は、私と同じ様にジュリーの雇用主である友人と同行し、約15人のメイドさん達、その内の数人が連れてきたボーイフレンド7名ほどでした。

彼らは殆どが(?)エジプト人で、メイドさん達が働くマンションでの下働きやガードマンとして働く内に親しくなりました。聞くところによると、彼らの月給は80~100JDで2万円に満たないのです。因みに、フィリピンメイドの月給相場は100~150JD程度です。

この日集まったメイドさん達の多くは「雇用主に恵まれている」といえます。何故なら、金曜日に休日が取れるからです。ただし、彼女達の殆どが不法滞在でしょう。以前も書きましたが、通常東南アジアからの出稼ぎメイドは、外出はもとより、電話や友人の来訪を制限され、一切の外部との連絡が取れない状態にあるのです。それは「盗難や逃避の手引を恐れるあまりに考え出された対策」で、人間不信の表れです。

私が伝えたいのは、まさしくその部分で、“人権無視の雇用形態とそれがまかり通る現地(中東)のモラル”です。それは、ここに集まった彼ら、彼女らにそれぞれに共通した問題なのです。しかも、メイドを雇う経済的余裕のある人達の人権意識がこの体ですから余計です。我が家の家主さんの話では「メイド雇用はいわゆる世間体や見栄で、雇えるはずのない人達が雇っているケースがある」との事でした。そんな事情も背景に、皆な警察の検挙を恐れながらも、健気に働き、その稼ぎを故郷で待つ家族に仕送りしているのです。

昼食パーティの後、小さなホテルの地下にあるディスコに皆で繰り出し、思いっきり踊る彼らの姿がありました。こんな日が、こんな楽しみがたまにはあって当然ですね。

午後五時過ぎ、昨日の夕方からの休暇を終え、一人、又一人と、門限までに雇用主の元へ急ぐ彼女達の後ろ姿を見送りました。そして、ヨルダンには、こんな休日の自由な時間さえもないメイドさん達の方が圧倒的に多いことを忘れてはいけません。



これでも目一杯のお洒落かな?



ありったけのエネルギーを
発散させて踊る

話題 其の40：“臭い”

皆さんにも、「長い時間をへだてても鼻の奥のどこかに記憶された臭い」というものがあるでしょう。

私の場合それは、職場の女性部長や秘書の“これでもか”という激しい化粧水の臭いが、フィリピンネオン街を思い起こさせ、死海の水際に立つと、その塩風の香りで、故郷長崎の磯部で遊ぶ幼い自分が蘇ってきます。私が「海外で生活したい」と半分病気のように思い込んでいる理由の一つは、大好きなテレビの海外特番(昔の“なるほどザ・ワールド”など)を観ていても伝わってこないものを求めているような気がします。例えば、ものの考え方や味とか気温や風など肌で感じる感覚、そして「臭う」等の生活体験です。未だ「ヨルダンの臭いは何かな?」と考えても、これといって思い起こせません。それよりは、イスラム教や現地の対日感情に対する危険な匂いばかりを嗅ぎだそうとしているような毎日です。実際には、イスラムも対日感情も危険というよりは、安全な香りが漂っています。ヨルダンの生活で記憶される幾つかの臭いに、今後の生涯で何度か出逢うだろうと思うと、「しっかりいろんなものの臭いを嗅いでおこう」と決意する自分が滑稽です。(限度を守って?)
